

コレクション展(常設展)

三岸節子 ヨーロッパを巡って 新収蔵作品とともに

会期：2026年8月18日(火)～11月8日(日)



展示目録

※都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録の番号は作品の並びと異なります。

番号	作品名		制作年	年齢	縦×横(cm)	号	技法・材質
1	馬		1930年代後半	30～34	24.3×33.3	4F	油彩・キャンバスボード
2	室内		1930年代後半～40年代前半	30～39	60.0×90.9	30M	油彩・キャンバス
3	静物		1942(昭和17)	37	52.7×45.0	10F	油彩・キャンバス
4	室内		1942(昭和17)	37	91.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
5	花	※	1947(昭和22)	42	45.2×37.8	8F	油彩・キャンバス
6	果物籠		1940年代	35～44	45.8×53.3	10F	油彩・キャンバス
7	花と魚		1952(昭和27)	47	65.1×90.9	30P	油彩・キャンバス
8	イル・サンルイ		1954(昭和29)	49	41.0×31.0		鉛筆、パステル、水彩・紙
9	無題	※	1950年代	45～54	24.5×30.5		水彩、オイルパステル、コラージュ・紙
10	花	※	1950年代前半	45～49	35.3×41.5		版画(リトグラフ)
11	火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)		1960(昭和35)	55	72.7×60.6	20F	油彩・キャンバス
12	カーニュ風景		1969(昭和44)	64	34.0×27.0	5F	油彩・キャンバス
13	スペインの白い町		1972(昭和47)	67	72.5×60.0	20F	油彩・キャンバス
14	小運河の家(1)		1972(昭和47)	67	100.0×81.0	40F	油彩・キャンバス
15	花	※	1972(昭和47)	67	55.5×46.5	10F	油彩・キャンバス
16	大運河にて		1973(昭和48)	68	60.6×73.0	20F	油彩・キャンバス
17	ブルゴーニュの麦畑		1978(昭和53)	73	92.0×65.0	30P	油彩・キャンバス
18	ブルゴーニュのブドー畑		1979(昭和54)	74	80.3×100.0	40F	油彩・キャンバス
19	僧院		1979(昭和54)	74	100.0×100.0	40S	油彩・キャンバス
20	ニースのプロムナードサングレ		1980(昭和55)	75	45.0×32.0		パステル・紙
21	崖の上(アンダルシアの)		1987(昭和62)	82	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス
22	冬の終り	※	1987(昭和62)	82	100.0×100.0	40S	油彩・キャンバス
23	小さな町(アンダルシア)		1987(昭和62)	82	89.0×116.0	50F	油彩・キャンバス
24	城のある町		1988(昭和63)	83	120.0×120.0	50S	油彩・キャンバス
25	花(ヴェロンにて)		1989(平成元)	84	60.0×92.0	30M	油彩・キャンバス
26	自筆原稿「ヴェロン記」原稿用紙11枚 『花より花らしく』(1977年、求龍堂)掲載						
三岸黄太郎作品							
27	作品B	※	1950年代後半	25～29	87.0×113.0	50F	油彩・キャンバス
28	わが家よりのエッフェル塔		1991(平成3)	61	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス

※は新収蔵作品(No.9, 10, 27は2024年度寄贈、No.5, 15, 22は2025年度寄贈)

そのほか 三岸節子<自画像>(1925年作) レプリカ …原画は「生誕120年 三岸節子展」に巡回中

三岸節子 ヨーロッパを巡って 新収蔵作品とともに

三岸節子(1905-1999)は、独立美術協会や新制作派協会の展覧会に、フランス近代美術に学んだ装飾的な室内画や造形的な静物画を発表し、画壇での評価を確立しました。1954年には、フランスに留学していた長男で画家の三岸黄太郎(1930-2009)を頼って念願の渡欧を果たし、パリ、南仏カーニュ、スペイン、イタリアを訪れて翌年帰国しました。その後、埴輪や太陽賛歌の連作に取り組みますが、欧州の風景の美しさが忘れられず、1968年、カーニュに長男一家とともに移住しました。各地でスケッチを重ねて多彩な風景画を生み出し、1974年にパリで開催した「花とヴェネチア」と題した個展で高い評価を得ました。これを機にブルゴーニュ地方のヴェロン村の農家を買ってアトリエに改築し、1989年まで、ここを拠点に制作に励みました。

本展では、近年新たに当館のコレクションに加わった作品を中心に、フランス、スペイン、イタリアなどヨーロッパ各地を巡って描いた豊かな風景画など生涯の作品を紹介します。

No.9 〈無題〉

1950年代後半に取り組んでいたはり絵による抽象的な作品です。赤い紙とパステルで自由に画面を構成しています。はり絵は、作者が好んだフランスの画家アンリ・マチスも晩年に盛んに取り組んでいた技法です。1959年には「三岸節子はり絵展」を開催して埴輪や鳥をモチーフとした作品を発表し、優れた造形力が評価されましたが、現在残されている作品は希少です。

No.15 〈花〉

南仏カーニュ滞在中に描かれた作品です。花は生涯にわたって描き続けたモチーフですが、渡仏後は地中海に面した地域の鮮烈な光を反映してか、とりわけ色鮮やかになりました。本作品もまるで黄金に輝くような背景の中に、深紅のバラを思わせる色鮮やかな花が浮かび上がっています。

No.16 〈大運河にて〉

フランス滞在中、たびたびヴェネチアを訪れ、運河をゴンドラで進みながらスケッチをしました。スナップ写真も参照しながらアトリエで大作に取り組み、運河と家並みが作り出す様々な構図の風景画を描きました。本作品ではとりわけ壁の表現に工夫がなされ、絵具を塗り重ねて歴史を経た壁の質感が再現されています。

No.22 〈冬の終り〉

1987~89年頃にスペイン南部アンダルシア地方のアルカディア・デ・グアディスの家並みを描いた連作のうちの1点です。赤い屋根と白壁、そして青空のみに簡略化することで、色彩の鮮烈さをより際立たせています。この連作には様々なヴァリエーションがありますが、本作品ではとくに正方形の画面に描くことで、手前の赤い屋根の連なりから白い壁、そして空へと続く広がりや奥行きが表現されています。風景の中の印象的な部分を独自の視点で切り取り、鮮烈な色面の組み合わせで構成するという作者の風景画の特徴が表れています。

No.24 〈城のある町〉

イスラム支配時代に要塞であったアンダルシア地方のラコラオーラの城を描いた作品です。手前に力強い筆づかいで街並みを、その奥に見上げるような角度で城を描いています。同じ城を描いた作品は5点ほど知られていますが、本作品はとりわけ大胆な黒い線が印象的で、見る者に迫り来るような迫力ある構図となっています。

No.27・28 三岸黄太郎〈作品B〉・〈わが家よりのエッフェル塔〉

三岸好太郎・節子の長男である三岸黄太郎は、1953年、23歳で初の個展を開催した後、フランスへ留学しました。翌年、節子と合流してカーニュに滞在し、スペインなどを旅行して帰国しました。帰国後は〈作品B〉に見るような造形的な裸婦像を描き、新進画家として認められました。この頃、節子の兄の吉田章義は、島根県の大東町(現在の雲南市)で鉱山の開発に携わっていましたが、〈作品B〉は島根県の章義の会社の関係者が所蔵していた作品です。渡仏の前後、節子と黄太郎は島根を訪れ、1956年には親子展も開催しました。章義は二人の画家としての活動を支援し、いずれは美術館を建てることも考えていました。

1968年、黄太郎と節子は再び渡仏し、黄太郎の運転する車で様々な地を訪れるなど行動を共にしました。同じ場所を描きながらも二人の表現は大きく異なり、エッフェル塔もその一つです。雷に照らされたパリの街並みを強い色彩で描き出した節子と異なり(ハイビジョンコーナーの映像参照)、黄太郎の〈わが家よりのエッフェル塔〉では、霧に包まれたような静謐な世界が作り出されています。黄太郎が生まれたときに好太郎がつけた名前は「巴里(パリ)」で、「黄太郎」は好太郎が好んだ黄色から節子がつけた名前でした。パリは、好太郎と節子が長年憧れを抱いた場所でした。